

社長といきなり新婚生活!?

## 1 結婚という名の契約

(こんな大切な日に寝坊するなんて。私のバカ……！)

月曜日の朝、細谷紗織は息を切らして走っていた。満開の桜に見惚れる余裕もない。

今日は新ブランドコレクションを決める大事なプレゼンの日だ。一ヶ月前からコツコツとデザイン案とコンセプト資料を用意して、準備は万端だった。

それなのに、睡眠不足がたたって遅刻などしては、本末転倒にも程がある。

紗織は腕時計を確認しながら、急いでオフィスの自動ドアをすり抜けた。

(始業時間まであと五分……)

閉まりそうになったエレベーターにぎりぎり乗り込み、焦れたように階数表示を見つめる。

紗織が勤めるアパレル会社『ロワゾ・インターナショナル』のデザイン部は、オフィスの十二階だ。

(……九、十、十一……十二！)

エレベーターが開いたと同時に走りだし、デザイン部へ駆け込む。なんとか朝礼がはじまる前に到着できて、紗織は安堵のため息をこぼした。

「はあ、はあと乱れる息と、汗で額に張り付いた髪を整える。  
「紗織、おはよう」

振り返ると、同期で親友でもある木島澄玲が笑顔で近づいてきた。

「澄玲ちゃん、おはよう」

挨拶した紗織の顔を、澄玲は驚いたように覗き込んでくる。

「すごい汗。もしかして走ってきたの？」

「うん。寝坊して焦っちゃった。間に合ってよかったよ」

紗織は眼鏡を取って、流れる汗をハンカチで拭いた。

「それは朝からお疲れ様。また遅くまでDVDでも観てたの？ 目の下のクマ、すごいわよ。あんな、煮詰まると、夜通しDVD鑑賞しだすもんねえ」

そういう澄玲も、ふあと小さく欠伸を噛み殺している。きっと彼女も徹夜でコンペの用意をしていたのだろう。

「彼氏とお泊まりで寝不足……っていう色っぽい理由じゃないとこが、残念よね」

からかうように言って笑う澄玲に、紗織は肩を竦めてみせる。

そのとき、紗織はふと澄玲のストッキングが伝線していることに気づいた。

「澄玲ちゃん、ストッキング伝線してるよ」

「うそ。やだ……いつの間にか」

身体を捻って伝線したところを確認し、澄玲が顔をしかめる。

「私、替えを持つてるから使って」

紗織は自分のバッグの中からストッキングの替えを取り出し、澄玲に差し出す。

「ありがとう紗織。助かるよ」

「いえいえ。どういたしまして」

にっこりと紗織は笑みを浮かべた。その表情を眺めて、澄玲がうーんと唸る。

「何？ 人の顔をじっと見たりして。あ、どこかおかしい？」

紗織は思わず頬に手を当てた。

「あんな、この間、叱られて泣いている新入社員の女子にハンカチ貸してあげてたわよね。徹夜明けの男子にはお弁当かけてあげたり、風邪引いて咳き込んでる上司に飴あげたり……。世の男どもは、どうしてあんなの魅力に気づかないかなあ」

「澄玲ちゃんったら。もう、いいから、行っておいでよ」

澄玲は、いつも紗織に彼氏ができないことを心配してくれる。紗織は単に、困っている人を放っておけない性質というだけなのだが。

アパレル会社に勤めていても、ファッションもヘアメイクも普通だし、とりたてて美人というわけでもない。澄玲は紗織がモテないはずはないと言ってくれるが、二十七歳になるまで誰も付き合ったことはなかった。でも寂しいと思ったことはない。それよりも、紗織にはずっと大切なことがあったから。

憧れつづけたキラキラふわふわした服を、誰かのために作る——ファッションデザイナーとして

誇れる自分になりたい。

そう思ってた六年。だが、いまだ自分が手掛けたブランドにヒットはなかった。このところ任せれる仕事は、他のデザイナーの補佐や細々した作業ばかり。

誰でも夢は見られる。けれど、デザイナーとしての才能やセンスは、どんなに努力したところでどうにもならないのだ。

紗織はそれを、入社六年目にして痛感していた。けれど、そう簡単に諦められる夢でもない。だからこそ紗織は、今日のプレゼンに懸けていた。

朝礼が終わったあと、紗織は同僚と一緒にプレゼンを行う会議室の準備に取りかかる。

「細谷さん、そっちに資料を置いてくれる？」

「了解」

長テーブルに足りない椅子を追加し、一冊ずつ資料を置いて、プロジェクターの調整をした。

「なんか緊張してきたな……」

紗織が呟くと、手伝いをしていた子も頷いた。

「プレゼンは何度やっても緊張するよね」

「緊張して内容が飛んじやいそうだから、始まる前におさらいしておこうかな」

準備を終えた紗織は「じゃあ、あとでね」と同僚に断って、自分のデスクに向かう。

「細谷さん、ちょっといいかな？」

会議室を出てすぐの廊下で部長に声をかけられた。

「はい。なんででしょうか」

「悪いんだが、これからすぐ、『ロワズ・ブルー』のオフィスに行ってもらいたい」

「……え？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

ロワズ・ブルーというのは、紗織の勤めるロワズ・インターナショナルの子会社だ。

新人デザイナーの育成の場としてロワズ・ブルーが設立されたのは、今から三年前。だが、本社であるロワズ・インターナショナルのデザイナーたちの間では、ロワズ・ブルーは使い捨ての実験場所だとか、社員の左遷場所だとかいう黒い噂が立っていた。

（私が、ロワズ・ブルーに……？ それって、どういうこと？）

「で、ですが私は、これからプレゼンが……」

「あ……詳しいことは、あちらの社長が直々に説明されるそうだ。君は会議には出ず、すぐに向かってほしい」

「待ってください。部長……」

紗織は震える声で、とっさに部長を引き止める。

「すまないが、僕はこれからやる必要があるから。じゃあ頼んだよ」

説明を避けるように、部長はそそくさと踵を返した。紗織は廊下に立ち尽くし、去って行く部長の背中をただ見送る。

「ねえ、細谷さん、もしかして……」

「……だよね」

茫然とする紗織の周りで、社員がひそひそと噂話をはじめた。ちらちらと向けられる好奇の視線が、紗織の不安を煽る。

よそよそしい部長の態度と突きつけられた言葉が、頭に焼きついて離れない。もう自分には、プレゼンに参加する資格さえないと言うのだろうか。

頭の中がネガティブな思考に占領されそうになり、紗織はぶんつと頭を振った。

わからないことをうごうご考えていても仕方ない。とにかく言われたとおり、ロワゾ・ブルーに行かなくちゃ。紗織は急いでデスクに戻り、荷物を持ってオフィスを出た。

紗織は、小さな頃からショップに置かれているファッションカタログが大好きだった。いつか大人になったら、カタログに載っている女の子のように綺麗な服を着て、絵本のお姫様みたいに王子様に見つけてもらえたら……などとロマンチックなことを夢見ていた。

けれど、夢と現実の違い。小さな繊維会社を営む細谷家の暮らしは貧しく、夢見たような綺麗な服を着ることはできなかった。

そんな紗織の中学時代のあだ名は『地味子』。しかし、彼女の夢は形を変えてつづいていく。高校に入学した紗織は被服部に入部し、作り手を目指すことにした。

真っ白なキャンバスに、思いのままデザインを描いていく。

ドレスじゃなくなつて、ワンピースにスワロフスキーやビーズをつけて、細かいレースを飾つたらどうだろう。ガラスの靴がなくなつて、爪にかわいいペディキュアを塗つたらいいじゃない？ アイデアは尽きず、どんどん膨らんでいった。そして、気づいたのだ。お姫様になるより、こっちの方がずっと素敵だ、と。

誰かを笑顔にするために、キラキラふわふわした服を作りたい。

紗織はファッションデザイナーを目指して、四年制の専門学校に入学した。その後、運よくアシスタントをしていた大手アパレル会社ロワゾ・インターナショナルに入社。

三年間の下積みを経て、ようやくファッションデザイナーを名乗ることができた。だが、未だに結果を出せていない。

『地味子』からファッションデザイナーになった細谷紗織は、今なお地味に、夢と現実の狭間でもがいていた。

本社を出た紗織は電車に乗り、隣駅で降りる。そこから、地図を頼りに歩いて十分ぐらいでロワゾ・ブルーの入る大きなビルに着いた。

無意識に、はあ……と重いため息がこぼれる。

重い足を動かし受付で本社から来たことを告げると、すぐに社長室に案内された。

重厚な扉の前に立ち、紗織は緊張で身を固くする。

(用件はなんだろう。体のいい自主退職を勧められたりして……)

胃がきゅうつと引き攣れ、息が詰まりそうになる。

そんな紗織の前で、受付の女性がドアをノックした。

「失礼いたします。本社から細谷様がいらつしやいました」

一拍おいて、中から返事があった。受付の女性がドアを開け、笑顔で「どうぞ」と中に促してくれる。そのまま戻ろうとする彼女を、心細さのあまり引き止めてしまいたくなくなった。

一人残された紗織は、おそろおそろ社長が座っている方を見る。背後の窓から陽が射し込み、逆光で顔がよく見えない。

「ようこそ。デザイナーの細谷紗織さん？」

低く甘いテノールに、紗織は弾かれたように返事をした。

「は、はい」

緊張で、心臓が今にも飛び出してきそうなほどの爆音を立てる。

陽が雲に覆われ、目の前に座っている社長の顔が見えてくる。思っていたよりずっと若い。おそらく三十にも届いていないだろう。驚くほど端正な顔立ちをしていた。

さらりと艶やかに流れ落ちる前髪の隙間から、宝石のように澄んだ目が見える。甘さの滲む涼し気な目で見つめられ、どきりと鼓動が高鳴った。

まるで獲物を捕らえんばかりの眼差しに紗織は戸惑う。しかし次の瞬間、社長はやんわりと表情を緩め、微笑を浮かべた。

「本年度からロワゾ・ブルーの代表を務めさせてもらうことになった、水瀬千尋です。よろしく」

水瀬のやわらかな微笑みを見た瞬間、紗織は思わず息を呑んだ。

その笑顔には憶えがあった。けれど、どこで見たのか、すぐに思い出せない。わかるのは、どこかで見たとあるという漠然とした感覚だけ……

デスクに両手を組んで小首をかしげる彼は、一度会ったら忘れられない美形だと思うのだが。

思い出せずにモヤモヤしていると、「細谷さん？」と水瀬に声をかけられた。

「す、すみません。細谷紗織です。よろしくお願いします」

紗織がぎこちなく頭を下げると、水瀬は一拍おいて静かに口を開いた。

「さっそくだけで」

水瀬は手元の書類に目を落としつつ、こちらに視線を向ける。紗織は覚悟を決めて、ぎゅつとこぶしを握った。

「これより君には、ロワゾ・ブルーのデザイン部に所属してもらいたい」

(……やっぱり)

無意識に肩を落とす紗織に、水瀬はつづけて言った。

「僕は本CEOの命令で、ロワゾ・ブルーの業績をアップさせるため、パリ支社からここに呼ばれた。最初の仕事として、新規ブランドを立ち上げるつもりでいる。君には、そのデザイナーを任せたい」

「私に新規ブランドの立ち上げを……?」

「ああ、そうだ」

左遷という言葉の頭を浮かべていた紗織にとつて、水瀬の言葉は思いがけないものだった。突然巡<sup>めぐ</sup>ってきた大きなチャンスに、紗織の表情が輝く。しかし、すぐに返事をしようとする紗織を制し、水瀬が椅子から立ち上がった。そのままデスクを回って紗織の目の前に立つ。

水瀬はかなり上背があるため、あまり背の高くない紗織は彼を見上げなくてはいけなかった。

「それからもうひとつ。これを君に」

そう言つて、一枚の用紙を差し出す。

(……え?)

意味がわからず、紗織は水瀬の顔を見る。渡されたのは『婚姻届』だった。

「君には僕と結婚してもらおう。明日までにそれに記入してきてほしい」

——何? 今、なんて言つたの?

紗織が哑然としていると、婚姻届をトントンと叩かれた。

「聞こえなかった? 君は僕と結婚するんだ」

「け……結婚つて……一体、どういう……ことでしょうか?」

紗織は婚姻届の用紙を握りしめ、なんとか口を開いた。疑問符ばかりが頭の中に浮かび、まったく話についていけない。

(それに、彼の水瀬つて苗字、本社のCEOと同じ……)

「カムフラージュさ」

「カムフラージュ?」

「ああ。フランスから戻ってきてからというもの、ひっきりなしに見合い話や縁談が持ち込まれてね。正直うんざりしているんだ。だったらもう、身を固めてしまおうかと思つてね」

「やっぱりそうだ。本社のCEOの息子は、パリ支店にいと聞いたことがあった。」

「だ、だからつて、どうして相手が私なんですか。社長の結婚相手なら、私よりもっとふさわしい方がいらつしやるんじゃないですか?」

混乱しながらも、紗織は必死に言葉をぶつける。

「……君のご両親は繊維会社を経営しているそうだね?」

急に話題が変わり、紗織は相手を窺<sup>うかが</sup>うように聞き返した。

「それが、どうかしたんですか?」

「その様子だと、君は何も知らされてないんだな。ご両親の会社は近年の不況で随分と業績が落ちているようだ。このままでは、あと数年もつかどうか……」

「えっ……そんな、嘘ですよね?」

両親の経営する繊維会社は、昔からいる職人さんを大切にすることで、小さいながらも優れた技術を評価されていたはずだ。そんなに業績が悪化しているなんて、紗織は一度だつて聞いてない。

「残念ながら事実だ。このまま何もしなければ、ご両親の会社は潰れる。君の家族はもちろん、従業員も路頭に迷うことになるだろうな」

水瀬は感情の見えない声で淡々と口にする。だからなのか、その内容はひどく現実味をもつて紗

織の頭に入ってきた。

「とはいえ、細谷繊維会社の技術の素晴らしさは業界でもよく知られている。倒産ということになって失うのは惜しい。そこで、だ。君さえよければ、細谷繊維会社の業績改善に向け援助をしてほしい」

混乱し言葉もなく立ち尽くす紗織を、水瀬の低く静かな声が現実引き戻す。

「ほ、本当ですか……!」

藁にもすがる思いで、紗織は目の前の水瀬を見上げた。

「ああ。その代わり、君には僕と結婚してもらおうよ」

なんでもないことのように告げられ、紗織はその場で固まる。

「そんな……」

「この際だ。もうひとつ、はっきり言っておこう。君は本社に不要な人間だと判断された」

言われた瞬間、紗織は息が止まるかと思った。本社に不要な人間——彼の言葉が、じわじわ紗織の胸を圧迫してくる。

「僕の提案を拒絶すれば、明日から君は、デザイナーとしての道も断たれることになるな」

急に目の前が真っ暗になった心地がして、婚姻届を持つ手が震えた。目の前に立つ整った顔の水瀬が、悪魔のように思えてくる。

彼は、自分と結婚さえすれば、紗織にデザイナーとしてチャンスを与え、さらには両親の会社も助けてやると言っているのだ。

「誤解しなくてもらいたいが、僕は君を奴隷のように扱おうってわけじゃない。カムフラージュである以上、周りから本当の夫婦だと思われなくちゃならないからね。逆に、仲良くしてもらわないと困るんだよ」

水瀬の手が紗織の顎をくいつと上げる。仲良くと言いながら、紗織を見つめる彼の綺麗な目には、まるで温度を感じない。

「紗織……結婚したら、僕は夫としての義務を果たそう。だから、君にも僕の妻として努力してほしい」

「努力？」

「そう。妻として僕を愛する努力だ」

冷徹な表情のまま甘い声で囁かれ、紗織の中で何かが溢れた。自分の意思とは関係なく、次々と涙が頬を流れていく。

(泣いている場合じゃない。わかっているのに……)

紗織は唇を噛みしめ涙を流す。すると水瀬は、長い指で紗織の目尻に溜まった涙を拭いた。

「僕は君を泣かせたいわけじゃない。ただ、君の——どんな人も幸せにしてあげられるデザイナーになりたいという夢を、壊したくないと思ったんだ」

紗織は驚いて彼をまじまじと見つめ返す。

(どうしてこの人が、それを知っているの……!?)

紗織を見下ろす水瀬の表情が、ふっと和らぐ。懐かしそうに目を細め、静かに微笑んだ。



「顔を見ても思い出さないか？ もう十年以上経つからな」

小さく呟いた彼は、紗織の頬にすべった涙を指で払う。

「僕の以前の名は、藍沢あいざわという」

「藍沢……！」

その名前にハツとする。以前、彼に会ったことがあるような気がしたのは、やはり気のせいじゃなかったのだ。

「うそ。千尋……くん、なの？」

信じられない思いで、紗織は目の前に立つ人を見つめる。

混乱と懐かしさと、しこりのように刻まれた苦い記憶が一度に湧き上がり、茫然と立ち尽くす。

高校の同級生である千尋とは、卒業以来一度も会うことはなかった。同じ部活で共にデザイナーの道を目指した彼とは、あることがきっかけで仲違いしそのままとなっていたのだ。再婚した母親と海外に行ってしまった彼とは、もう二度と会うことはないと思っていたのに……

紗織は、水瀬の中に懐かしい面影おもかげを探した。高校のときより輪郭がシャープになり、身体つきもすっかり大人になっている。けれど、改めて見ると、目元にあの頃の面影が残っていた。

しかし、かつての思い出に浸ろうとする紗織の思考をシャットダウンするように、千尋が口を開く。

「もう一度、言うよ」

微笑みを浮かべたまま、千尋が紗織の唇を指先でなぞった。

ぞくり、と甘美な感触が紗織の背筋を走っていく。

「これは契約だ。君は僕と結婚して、僕にふさわしい妻になるんだ。その代わりに、僕は君にデザイナーとしてのチャンスと両親への援助を約束する」

優しい笑みを浮かべながらとんでもないことを言ってくる千尋に、息を呑む。

（彼は、本当に……あの千尋くんなの？）

こんなふうに、結婚を契約として告げてくること自体、考えられないことだ。

何か言おうと思うのに、衝撃と混乱で言葉が出てこない。

「なんだ。もしかして、チャンスを活かす自信がないのかい？」

紗織はハツとして千尋を見る。すると彼は、蔑むような眼差しを紗織に向けた。

「入社六年目の中堅デザイナーだが、ヒット商品はなし——君のことは調べさせてもらったよ。このままサポート係として埋もれるつもりか？」

「なっ！」

「君はあの頃と何も変わらないな。肝心なときに力を出さない……」

失望した——そう千尋が言うのを察した紗織は、思わず声を荒らげる。

「そんなことありません！ 私は必ず、デザイナーとして成功してみせます！」

衝動のままそう反論した紗織は、千尋の表情を見て身を強張らせた。

紗織を見つめる千尋は、満足げな笑みを浮かべている。

やられた。ここにきて、紗織はようやく千尋の意図を悟った。

「それなら、君の選ぶ答えはひとつだ。明日までに、それにサインと判子<sup>はんこ</sup>を押しきて」  
千尋の言葉が、遠くに聞こえる。まんまと彼の挑発に乘せられ、自分で逃げ道をなくしてしまつた。

（あんな啖呵<sup>たんか</sup>を切っちゃつて、どうするのよ私……）

じわじわと焦りが湧いてくる。でも、今さら引くに引けない。

内心で葛藤<sup>かつとち</sup>しながら言葉もなく立ち尽くしていると、ぐいっと左手を引かれた。身じろぐ間もなく薬指に冷たい金属の枷<sup>かぎ</sup>が嵌<sup>は</sup>められる。

「あ……っ」

「これは契約の証<sup>あかし</sup>《エンゲージ》だよ」

（まさか、もうこんな物まで用意していたなんて……）

左手を見つめて茫然とする紗織に、千尋は「これからの君に期待しているよ」と言つて、残酷なまでに甘い微笑みを浮かべた。

「今日中に本社から荷物を移動して、必要な引継ぎをしてほしい。人手が必要なら手配するから連絡してくれ」

「……わかりました」

「話は以上だ。歩ける？　すぐく震えているね。下まで送つていこうか？」

「結構です。大丈夫……ですから」

「そう。じゃあ、これからよろしくね」

紗織は震える膝に何とか力を込めて、千尋に向かって頭を下げた。そのまま、くるりと踵<sup>かかと</sup>を返してドアに向かう。

早く、早く、一刻も早く。この息苦しい状況から解放されたい。

社長室を出ると、紗織はへなへなとその場に頽<sup>たふ</sup>れた。

さつきまでのことが頭の中をぐるぐる回っている。気持ちがまったくついてこない。これが夢なら、今すぐ覚めてほしかった。でも、これが現実であると知らしめるように、左手の薬指にはキラキラと眩<sup>まぼ</sup>しいダイヤモンドが輝いている。紗織はぎゅっと目を閉じ、きつく手を握った。

拒否したところでもならない。今の自分には、この状況を打開する手立ては何もないのだから。

慌<sup>あわ</sup>ただしく荷物の移動と引継ぎを済ませ、紗織は逃げるように本社を出た。その足で、実家へ向かう。社会人になつてからは、盆と正月ぐらいしか実家には行かなくなつたので、両親に会うのは正月以来、三ヶ月ぶりだ。正月に会つたときは、何も変わったことなどなさそうだったので、それとも、娘には言えずにいただけなのだろうか。

（なんて言つて切り出そう……）

千尋の言うことを鵜<sup>う</sup>呑みにせず、両親からきちんと話を聞かなくてはならないと思つた。たとえ彼の言うとおりなのだとしても、ちゃんと自分で真実を知つておきたい。

築三十年の古い家を前にして、インターフォンを押す指が震えた。すぐに母親の声が出て玄関のドアが開く。

「まあ、紗織。どうしたの、仕事帰り？」

母が、紗織の突然の訪問にびっくりした顔をする。

「うん。ちょっとお邪魔してもいいかな？ お父さんもいる？」

「ええ、いるわ。ちょうどこれから、夕飯なのよ。紗織もまだだったら、一緒に食べていきなさい」

「ありがとう。そうさせてもらうね」

母の後ろについて居間に入ると、父もまた驚き、すぐにうれしそうな顔をした。

「紗織、正月以来だな。元気にしていたかい？」

笑顔を取り繕い、「うん」と答えると、母が今ごはんをよそうから、と台所に入っていく。

「仕事はどうだ？ 確か大事なコンペがあるとか言っていたよな」

紗織はテーブルを挟んで父と向かい合うように座り、手に持っていたバッグを足元に置いた。

「うん。ぼちぼちやってるよ。お父さんこそ、会社はどうなの？ 相変わらず？」

「うーん、まあ、このご時世だしな。色々あるさ。だが、おまえはうちのことは気にせず、自分のやりたいことを精一杯やりなさい」

父が穏やかにそう言って、母の方を見る。母も同じように「ええ」と頷いた。

千尋とのがなかつたら、きっと父の言葉になんの疑問も持たなかったかもしれない。でも、

ちゃんと事実を確かめたい。そう思いながら、紗織は覚悟を決めて、口を開いた。

「会社で、うちの業績が悪化しているという噂を聞いたの。お願い、本当のことを教えて」

両親は顔を見合わせ、父が「そうか……」とため息をつく。

「不況だから仕方ない。色々打てる手は打っているが、赤字になる一方だな」

父は手に持っていたビールグラスを置いて、物憂げに言った。

「どうして話してくれなかったの？」

まさかそんな大変だったなんて。今まで、家のことをちつとも考えてこなかった自分を反省する。二人の言葉に甘えて、学校に行かせてもらって好きな事をやらせてもらって……自分のことばかり考えていた。もっと気にかけるべきだったのに。

「親は子に心配をかけたくないものだよ」

父が見守るような視線を向けてきた。

「そうよ。紗織はうちのことは心配しなくていいの。紗織がやりたいことを頑張っているのが、私たちの喜びなんだから」

母が目を細めて紗織を見つめる。

「お母さん……」

「大丈夫。無事お前に結婚式を挙げさせるまで、頑張るさ」

父が自分を鼓舞するように力強く言う。母も笑みを浮かべた。

「紗織はどんな人と結婚するのかしらね？ あなたの将来が楽しみだわ」

——紗織は何も言えなかった。

一方的に持ちかけられた契約結婚。……自分勝手に腹は立つけれど、紗織にとっても好条件なのだと、冷静になった今ならわかる。

『これは契約の証《エンゲージ》だよ』  
千尋の甘い囁きが鼓膜に蘇ってくる。

——逃れられない。両親の会社を存続させるために、今の紗織ができる事は、千尋の提案を呑む事だけなのだ。

(私にはもう千尋くんと結婚するしか選択肢はない……っていうことなのね)

甘い言葉で誘惑し、やさしい声で懐に入り込む、悪魔のような人だ。

いつか私だけの王子様が……と、無邪気にお姫様に憧れていた幼い頃の自分。その夢はデザイナーになることへ形を変えていった。けれど、女である以上、それなりに結婚に夢を抱いていた。その夢が、黒く塗りつぶされていく。

悪魔との契約は、もう、交わってしまったのだから。

## 2 誓いのキスを君に

翌日、紗織はサインと捺印を済ませた婚姻届を携え、社長室に向かった。

昨晩はまったく眠れなかった。それでも一晩考えて、紗織は覚悟を決めた。深呼吸し、重厚な扉をノックする。すると、すぐに返事があった。

「——おはよう。覚悟は決まった？」

部屋に入るやいなや出迎えた千尋にそう聞かれる。思わず紗織は、むっとした。

こちらの気も知らず、千尋は朝からとても爽やかだ。端整な顔には余裕の色が浮かんでいる。

爆発しそうな気持ちは押し殺し、紗織は千尋へ歩み寄った。そして、昨日からずっと気になっただけのことを尋ねる。

「どうして、ここまでしてくれるんですか？ あなただって、好きな人と結婚したいっていう気持ちはあるでしょう？ 相手は私じゃなくてもいいはずですよ」

冷静になって考えれば、わざわざ契約など結ばなくても千尋の相手となる女性はいくらでもいる。どうして自分が選ばれたのか、その理由がわからない。

すると、千尋の瞳がふっと和らいだ。

「あいにく、結婚したいと思うほど好きな女性はいなくてね。君を選んだのは、しいて言うなら昔

のよしみかな」

「昔のよしみ……」

なぜか、胸にちくりと痛みが走った。

(それって、知らない相手より私のほうが都合がよかつたってこと?)

湧き上がるもやもやに、紗織は顔をしかめる。

「君の手にあるものを僕に渡して」

そんな紗織に構わず、千尋は婚姻届を取り上げた。

「婚姻届は、一緒に出しに行こうか？ それとも代理人に任せる？」

書面を確認しつつ、千尋が尋ねてくる。

「……契約、なんでしょう？ だったら、代理人に任せます」

紗織はそう言いながら、同時に心の中で自分自身に言い聞かせる。これは契約なのだ。

「わかった。それじゃあ事務的な手続きは、すべてこちらに任せてもらうことにするよ。君にはこれを渡しておこう」

手のひらに冷たいカードキーを持たされる。

「これは……？」

「新居の鍵だよ。君は週末までに、僕の家についで越してできるよう準備をしておいてほしい」

至極当然といった顔で言われて、紗織は目を見開いた。

「一緒に暮らす……って、本気で言っているんですか？ それも週末!？」

思わず頓狂な声が出た。まったくそのあたりは考えていなかった。てっきり婚姻届を出すだけの形式だけの結婚だと思っていたのに。

何を今さら、と千尋は呆れたように笑みを浮かべる。

「夫婦になるんだから当然だろう？ それに、きちんと二人が夫婦として生活していなければカムフラージュの意味がないからね」

覚悟を決めたとはいえ、人の弱みにつけこんでどんどん話を進めて行く彼に腹が立つてきた。

「つまり、フリをしてればいいんですね。仲のいい夫婦を演じればいいんでしょう？」

紗織は苛立ちに任せて、しかめっ面のままそう問いかけた。

「言ったはずだ。結婚したら、僕は夫としての義務を果たすと」

そう言って、千尋はいきなり身体を寄せる。

「だから君にも、一日も早く僕のことを好きになってもらわないと困る」

耳元で甘く囁かれ、紗織は顔が熱を持つのを感じた。きつと、赤くなっているに違いない。

「君と一緒に暮らすのを、楽しみにしているよ」

赤くなつた紗織を見て、彼がうれしそうに頬を緩めた。これはたぶん、からかっているだけだ。

思いどおりの反応を見せる紗織を、面白がっているのだろう。

ビジネスライクに契約と言ってみたり、好きになれと言ってみたり、千尋が何を考えているかさっぱりわからない。

紗織はさつそく、自分のした選択を後悔しはじめた。苛立ちと戸惑いの入り混じつた複雑な気持

ちと、遠い記憶の中で味わった甘い痛みが縋ない交ませになり、紗織を惑まわせる。

「さて、と。ひとまず午前中は新しいデスクを片づけていてくれ。午後に変更して、デザイン部の部長から君をみんなに紹介してもらおうよ。それと、君の他にデザイナーをもう一人入れることにしたから。あとで紹介する」

「……わかりました」

「婚姻届が受理されたら、すぐにメールで知らせるよ」

去り際に言われて、紗織はただ頭を下げた。

(受理されたら、メールで知らせる、か……)

まるで他人事ひとごとのようだ。今もまだ、結婚するなんて実感がわかない。けれど、現実逃避じじたいしていても、何時間後には、細谷紗織から水瀬紗織になるのだ。

(まさか、こんなふうには、千尋さんと結婚することになるなんて……)

社長室から出た紗織は、カードキーを握りしめ、思いっきりため息をついた。

昨日から紗織は、突きつけられた現実を受け入れるのに精いっぱい、千尋との今後をちゃんと考えられてはいない。

紗織はエレベーターに乗って移動している間、高校で初めて彼と出会った日のことを思い浮かべた。

今から十二年前――

高校に入学したばかりの紗織は、すでに将来ファッションデザイナーになることを意識していた。部活を選ぶとき、被服部に入ろうと考えたが、自信がなくなかなか入部に踏み出せないでいた。

そんなある日、新入部員勧誘のため被服部が展示していた作品に目を奪われる。思い思いに描かれた個性的なデザイン画には躍動感があり、紗織の創作意欲をかき立てた。感動しながら、ひとつひとつ展示を眺めてみると、同じように目を輝かせてデザイン画を見ている男子に気がついた。

(わ、キレイな男の子……)

キレイな顔立ちをした中性的な印象の少年は、まるで童話の中から出てきた王子様みたいだと思つた。ついじつと見つめていたら、不意に彼がこちらを見る。びっくりした紗織は慌あわてて俯うつむいた。

「君もこれ見てたの？」

低音のやわらかい声が、頭の上からかけられる。紗織は、おずおずと顔を上げた。

彼は表情こそ硬いものの、興味津々きょうみしんしんといった様子で紗織の返答を待っている。

「う、うん。すごく好きだなんて。私もこういうデザインを描けたら素敵だなんて思つて見てたの」

緊張しながら、紗織は感じたまま声に出していた。

じつと自分を見ている彼の視線が恥ずかしくて、また俯うつむく。

「きつと、作り手の『感情』がデザインを作るんだらうね。こうして作り手の想いがこもったデザインには、見る人の感情を引き出す力があると思うんだ」

紗織は驚いた。彼の言葉に、全身に電流が走ったような衝撃を受ける。言葉もなく見つめていると、彼が微かに笑みを浮かべてこちらを向いた。

「そういうの作りたいって思わない？」

紗織はうれしくなって、こくこくと頷いた。

「うん。思う。思うよ！ 私も着る人が幸せを感じられるような洋服を作りたいの！」

「じゃあ、また会えるかもね」

そう言つて微笑むと、彼は背を向けて行つてしまふ。

また……ということとは、彼もここに入部するつもりなのだろうか？

ほのかな期待と淡い想いを抱いて迎えた翌日、入部届を出しに行つた紗織は、彼と再会した。

「あ」

ほぼ同時に、二人の声が重なる。

「被服部、入ることにしたんだ？ よろしく」

「うん。こちらこそ、よろしくね！」

それが、紗織と藍沢千尋の出会いだった。

二人はそれから仲良くなり、感性を共有する『同志』から、互いに刺激しあふ『ライバル』になつていった。

「コンクール通算勝利数は、千尋くんの勝ちかぁ。次は絶対に負けないから」

「次も僕が勝つよ」

個人のコンクールでは競い合い、グループ発表では意見を出し合つて最高にいいデザインを作りに上げてきた。

（千尋くんも、私と同じ気持ちでいてくれたらいいな……）

胸に灯る彼へのあたたかな気持ちを大切にしながら、二年になつても『相棒』のような関係がずっとつづいていくものだと思つていた。

ところが、ある日を境に千尋は部活にあまり来なくなつてしまった。

心配のあまり訪ねて行つた紗織に、彼はぼつぼつと事情を話してくれた。両親が離婚し、彼は母親と二人で暮らすことになつたらしい。だが、経済状況が芳しくないで、学校をやめなくてはならないかもしれないと言ふ。

それを聞いた紗織は、ショックで言葉を失つた。

「心配かけてごめん。母親が別人みたいにしステリックになつたり涙もろくなつたりするのに、僕だけ自由にしてるわけにもいなくてさ……」

紗織はもどかしく思いながら彼の話に耳を傾ける。彼のために何かしたいのに、なんの力もない自分を痛感した。

そのとき不意に、彼と出会つた日のことを思い出す。

『感情』がデザインを作るのだと彼は言つた。想いを込めたデザインが見る人の心を動かすのなら、彼の心を輝かせるようなデザインも描けるのではないか。

今まで不特定多数を意識したデザインしか作つていなかつた紗織が、初めて特別な誰かのために

デザインを作りたいと思った。

「決めた。私、千尋くんが元気になるデザインを考えて、とびっきり幸せな衣装を作るよ」  
勢い込んでそう伝える紗織に、千尋は少し照れくさそうにしながらもうれしそうな笑みを見せてくれた。

「ありがとな」

そう言っつて、紗織の頭をくしやりと撫でてくれる。そんな彼が本当に大切だと思った。それからときが経ち、高校二年の夏休み明けのこと。

進路調査票を提出した紗織に、担任を通して被服部の顧問から有名ファッション専門学校の推薦を受けてみないかと打診があった。将来デザイナーを目指す者にとつて、何人も有名なプロを輩出している有名専門学校はどこより魅力的だった。なにより在学中からプロのアシスタントにつくことができるという利点がある。さらにこの推薦が通れば学費が免除されるらしい。

これまでのコンクールの実績を考慮して選ばれた候補者は二名……紗織と千尋だった。ただし、合格できるのは一人だけだという。

紗織はその話を聞いたとき、千尋の家庭の事情が頭をよぎった。

千尋は、高校をやめなくてはいけないかもしれないと言っていた。もし、推薦に受ければ、デザイナーとしての彼の未来を繋ぎ止めることができるかもしれない……そんな思いが芽生えた。

「正々堂々と勝負して、互いに悔いを残さないようにしましょう」

千尋はそう言っつて握手を求めてきた。もちろん紗織もそのつもりでいた。

けれど、コンペ直前——ずっと胸に抱えていた、彼がいなくなってしまうという不安が紗織の中で大きくなってしまったのだ。

そこで紗織は、コンペに出すために考えたAとBのデザイン案のうち、顧問が推してくれていたA案のアシンメトリーのドレスを、急遽B案に替えた。

その結果、千尋のデザインが受賞し、彼は有名専門学校の推薦枠に入ることが決まった。

だが彼は——

「どうして手を抜いたりした！ 君が作りたかったのは、こっちじゃないだろ」

そう言っつた千尋は、いきなり紗織のB案のデザイン画を破いた。

「ち、千尋くん、私は……っ」

紗織は誤解されたくなくて必死に説明をしようと、千尋の袖を引っ張ろうとした。それを千尋は振り払い、苦々しい表情を浮かべたまま声を震わせた。

「わかっているよ。君が何を思っつてそうしたのかなんて、手に取るようにわかる。だからこそ、許せないんだ！ 君にだけは、憐みの目で見られたくなかった。ずっと対等でいてほしかった。どうしてだよ……こんなことされて……僕がうれいと思うわけがないだろ！」

今までになく声を荒らげる千尋に、ビクリと紗織の肩が戦慄した。彼の言葉に、頬を平手で思いきり叩かれたような衝撃を受ける。

謝ることもできず、ただ立ち尽くす。そんな紗織を見ることなく、千尋は行っつてしまった。

足元には破かれバラバラになったデザイン画が散らばっている。



涙で視界が揺らぐ。自分の浅はかさによって、千尋を深く傷つけてしまった。

(失いたくなかったの……！)

でも、間違っていた。彼の未来を考えるなど、紗織の傲り<sup>おごり</sup>でしかない。すべて紗織の身勝手な願いでしかなかったのだ。けれど、千尋がいなくなってしまうかもしれない不安に取り憑<sup>つ</sup>かれた紗織には、それがわからなくなっていた。

その日から千尋は、紗織と口をきいてくれなくなった。

さらに後日、彼が推薦を辞退したと顧問から聞かされた。どんなに引き止めても、彼の考えは変わらなかつたらしい。代わりに紗織を繰り上げられないか先方に掛けあってみてもいいか、と聞かれたが、紗織はその話を断った。

そのときになって、紗織はようやく自分のしたことがいかに愚かだったかを思い知った。紗織は、正々堂々と勝負しようと言ってくれた彼の想いを、土足で踏みにじつたのだ。

紗織は別のフアッション専門学校への進学を決めたが、千尋が卒業後どうするのか聞けないまま時間だけが過ぎていった。

こんなふうにしこりを残した状態のまま、千尋と別れたくない。

そう思った紗織は、卒業式の直前、千尋に手紙を書いた。本当は、面と向かつてきちんと謝りたかつたが、うまく伝えられる自信がなかつたのだ。たくさん考えて、とにかくありのままの気持ちを手紙に綴<sup>つづ</sup>った。けれど、彼からの返信はなかつた。

卒業後、人づてに彼が再婚した母親と共にパリに行ったことを聞いて、愕然<sup>がくぜん</sup>とした。

(千尋くん……どうして何も言わないで行っちゃうの……！)

もう二度と会えない。どれだけ会いたくても、声も聞けない、顔も見られない、本当にさよならなのだわかつたとき、胸が張り裂けそうならい悲しかった。

ちゃんと正面からぶつからなかつたことを後悔した。あんなにそばにいたのに、どうして自分の気持ちを伝えなかつたのだろう。誰より大切に想っていたのに。

思えば、あれが紗織にとつての初恋だった。

苦く胸に残る記憶に、紗織は再びため息をつく。

(……千尋くんは、あのときのことを、今どう思ってるのだろうか?)

エレベーターから降りてデザイン部の自分のデスクに到着した紗織は、過去の記憶を振り切るように、荷物を整理しはじめた。

どれほど後悔したって、過去は変えられないのだ。今はとにかく、やるべきことをやらなないと。

そう思い、紗織は黙々と片づけをつづけた。

「さ・お・り」

いきなり耳元で名を呼ばれ、紗織はハッと我に返る。声のした方を見ると、本社にいるはずの澄玲がいた。

「わっ！ 澄玲ちゃん、どうしてここに？」

「あれ、聞いてない？ 私も、新ブランドを立ち上げるため、ロワゾ・ブルーに呼ばれたのよ」  
澄玲は誇らしげに鼻を鳴らした。

「え？ じゃあ、もう一人のデザイナーって澄玲ちゃんのことだったの！」  
紗織はびつくりして目を丸くする。

「黙ってごめんね。やりかけた仕事の引継ぎに時間がかかっちゃって。でも、こうしてまた、あんなと一緒に仕事ができうれしいわ。一緒に頑張ろうね」

「うん。私も澄玲ちゃんと一緒に心強いよ。……チャンスをもたらえたと思って、がんばらないとね」

紗織は自分を鼓舞するように呟いた。

「そうよ。ぼつちり結果を出して、本社の奴らに一泡吹かせてやろう」

澄玲がガッツポーズをとってみせる。さっぱり美人の澄玲がやると妙に迫力があり、つられて紗織は笑顔になった。

いつでも前向きな親友の存在は、つい塞ぎそうになる気持ちを軽くしてくれる。澄玲のおかげで肩の力がすんと抜けた。

「そうだ。崖っぷちの自分は、もう這い上がっていくしかない。気力で負けたらそこで終わりだ。

「片づけが終わったら、一緒にランチに行こうよ。景気づけに色々話しておきたいわ」

「そうだね。実は昨日からあんまり食べてなくて、お腹空いちゃった」

そう言っ、紗織は澄玲と微笑み合った。

ランチを目標に、てきぱきと片づけをしていると、澄玲が手を止めて話しかけてくる。

「ねえ……今気づいたんだけど、その薬指の指輪って……もしかして彼氏ができた？」

(澄玲ちゃんってば、目ざとい……！)

「えっ！ えっ！ これは……その、自分を励ますために……」

背中に汗をかきながら、なんとか指輪について誤魔化そうとする。

「あんた、そんなキャラじゃないじゃない。自分を励ますっていうなら、アニメグッズ集めるでしょ」

「うっ」

契約の証だと千尋に嵌められた指輪は、外したくても外せなかったのだ。指がむくんでいるからなのか、リングが細身のせいなのかはわからないけれど、どんなに引っ張っても抜けなかった。

そのため、不本意ながらも、紗織の左薬指には指輪がつけっぱなしになっている。

まったく、憎らしいことこの上ない。千尋の挑発的かつ得意げな微笑みを思い出し、むかむかしてきた。

澄玲は紗織の手を取り、指輪を覗き込む。

「ダイヤモンドの粒が大きくて綺麗ね。このデザインって有名なブランドのものじゃない？」

「え、そうなの？ もらいものだから、私はよくわからなくて」

しどろもどろになって言い訳をすると、澄玲がますます詰め寄ってきた。

「やっぱりもらったんじゃない。まさか、これってエンゲージリング!？」

「ちよっ！ 澄玲ちゃん声が大きいよ！」

紗織は慌あわてて、「しーっ！」と口に指を当てた。答えを求める澄玲の視線に耐えかねて、紗織は仕方なくかいつまんで状況を説明する。

「彼氏っていうか……実は、私、結婚することになっちゃって……」  
おずおずと打ち明けたら、澄玲が思いつきり固まった。

「……ええっ？ 結婚っていつ!?」

「近日、婚姻届を提出するところ、なんだよね。実は……」

澄玲が目を白黒させている。彼女が驚くのも無理はない。つい二日前まで、紗織には彼氏はおろか、浮いた話のひとつもなかったのだから。

「ちよ、そういう大事な話は早く教えてよ。まさか行きずりの男とデキちゃった婚じゃないよね？」  
声を潜ひそめて澄玲が聞いてくるので、紗織は苦笑した。

少なくとも、昨日今日出会った人ではないことは確かだけれど、どう説明したらいいのだろう。

「違うよ。えっと、高校時代の同級生なんだ。本当に偶然っていうか」

目が泳いでしまわないように、さっき振り返っていた過去を思い出しながら言葉を繋つなげる。

「なにになにもしかして運命的な再会しちゃいましたってやつ？」

澄玲がにやにやしながら冷やかすみたいに肘ひじで突ついてくる。

「……まあ、そうかな」

（運命的な再会……かあ。ある意味、とんでもない再会ではあるのよね。再会してすぐにプロポー

ズされたわけだし。でも、それは、ただ単に都合がよかっただけなんだよね……）

とりあえず紗織は、笑って誤魔化した。

「入籍だけ？ 結婚式はしないの？ 入社したばかりの頃、いつか結婚する日が来たら、自分で作ったドレスを着てみたいって言ってたじゃない」

ちよっと寂しそうに澄玲が言う。女性のファッションデザイナーなら誰もが一度は夢見ることかもしれない。

「う、うん。でも彼も忙しい人だから、今はまだそういうのは考えてなくて。とりあえず一緒に暮らしたいねっていう話をして、入籍を先にすることにしたんだ」

紗織は脳内妄想をなんとか並べつつ、はにかんでみせる。だが、自分で説明しててなんだか虚しくなった。

「そうなんだ。ほんとびっくり。もう……水くさいじゃないの。言ってくれたら、まっさきにお祝いしたのに」

「ごめんね。……勢いとタイミングっていうか、急に決まって」

説明しながら、良心がちくちく痛む。こんなので千尋の望むカムフラージュなんかできるのだから。あつという間にボロが出そうだ。

「じゃあ、今日のランチは私のおごりね。改めてお祝いはするけど、まずは色々ゆっくり聞かせてよね？ ほら、行こう！」

「あつ……澄玲ちゃん」

腕を引っ張られてよろめきつつ、紗織は澄玲のあとをついて行く。心から喜んでくれる澄玲を騙していることが申し訳なくて、心の中でゴメンと謝った。

ランチの間中、澄玲からは質問の嵐だった。なんとか高校時代を思い出して、嘘を織り交ぜ質問に答えていく。そうしているうちに胸がきゅつと甘く締めつけられた。改めて、彼と過ごした高校時代が自分にとってどれほど大切だったかを思い知らされた。

千尋はあのときのことをもうなんとも思っていないのだろうか……

食事を終え、デスクに戻った二人は、デザイン部の部長から社員に紹介してもらった。今週はひとまずみんなのサポートに回ることに落ち着く。

午後三時頃、ケータイを確認したら、一件SNSのメッセージが入っていた。

『四月十一日。大安吉日。婚姻届が無事に受理されました』  
送り主は千尋だ。

(大安吉日とか……なんかいやみっぼくない?)

心の中で千尋に文句を浴びせつつ、左手の薬指に目を留めた。

(私、本当に結婚しちゃったんだ……)

——もう逃げられないのだと思い、紗織は何度目かわからないため息をつくのだった。

その日の退勤後、駅を目指して歩いていると、鞆の中でケータイが振動した。画面をチェックす

ると、知らない番号からの着信だった。

普段は無視するところだが、なんとなく通話に出してしまったのが運の尽き。

『水瀬です』

聞こえてきた声にたちまち後悔した。

『今、外?』

「……はい。そうですけど」

緊張しながら、ケータイに耳を押し当てる。

『これから迎えに行くから、最寄り駅を教えてくださいませんか?』

「えっ……なんで、ですか」

紗織は驚いて、その場で立ち止まった。通行人の邪魔にならないように端に寄り、彼の返事を待つ。

『これから引越す場所を、下見しておいた方が安心ですよ。時間がとれたから案内するよ』

「本当に今週末引越すんですか? もっと先でもいいんじゃない?」

『約束、忘れたわけじゃないよね?』

提案ではなく強制。口調はやわらかいものの、有無を言わせないという意図が伝わってくる。

「……っ」

事前に下見させてもらえるのはありがたいけど、彼の思うとおりになんでも進んでいくのが気に入らない。

(これも、社長の言うところの夫の務めってやつ?)

「……わかりました。今、会社を出たばかりです」

むっとしながらも、紗織は渋々返事をした。

『了解。あと、十分ぐらいで行けると思う。じゃああとで』

電話が切れてから、紗織は思いつき「はぁぁ……」とため息をつく。悶々として待っていると、再びケータイが鳴った。

『着いたよ』

視線を上げた紗織はすぐに千尋を見つけた。黒のトレンチコートを羽織った長身の千尋は、まるでファッション誌から飛び出てきた男性モデルのようだ。雑踏の中でも、彼の端正な立ち姿はひときわ目立っている。

さらっとした黒髪が風に揺れ、涼しげな目元が露わになった。通り過ぎる女性たちが息を呑み、ちらちらと千尋を振り返っている。

それに比べて紗織は、相変わらず地味だ。

黒縁の眼鏡をかけた平凡な顔は言うまでもなく、ヘアスタイルもセミロングの髪を適当にシッシュでまとめただけ。

ファッションもアパレルの仕事をしているとは思えないほど面白くない。白のボウタイブラウスにグレーの膝丈スカート。足元はスカートと同系色のパンプスを履き、ロングニットカーディガンを羽織っただけの恰好だ。

(だって仕事のとくに着飾る理由がないもの。動きやすいのが一番じゃない……)

立っているだけで注目を集める彼のそばに行きたくない。

だからといって、ずっと待たせておくわけにもいかない。紗織は観念して千尋のもとへ向かった。(千尋くんは社長で、私は社員。仕事帰りだし、この場合、お疲れ様です……だよね?)

社長と千尋、どちらで呼べばいいのか悩んでいるうちに、向こうも紗織に気づいたらしい。こちらに向かって手を上げた。周囲の視線が自分に向きそうになったので、紗織は目立たないように慌て駆け寄る。

「社長、お疲れ様です」

悩んだ末にそう声をかけた。こちらまで注目されては敵わない。

「ああ、お疲れ様。車そこに停めてあるから、助手席に乗って」

見るとびかびかに磨かれた白い高級車が、彼の後ろでハザードランプを点滅させていた。千尋のそばに寄ると、品のいい甘い香りがふわりと漂ってくる。

彼が身に付けているスーツや時計もセンスのいいものばかりだし、なにより千尋自身が洗練されていた。

だからなのか、ふとした仕草について目が惹きつけられて、どきっとしてしまう。街を行き交う女性たちの視線が集まるのは、ごく自然なことなのだろう。

高校時代、線が細くて中性的な美少年だった千尋。今の彼を昔と同じ人だと考えてはいけないうちかもしれない。そうぼんやり考えながら、助手席のドアを開けようとすると、ぐいっとな腕を引っ張

られた。

「そっちじゃない。助手席はこっちだ」

(あ、左ハンドル……)

どうぞと右側のドアを開けられて、紗織はおずおずと助手席に乗り込んだ。

「お邪魔……します」

「そんなに硬くならないでいいよ。これから君の席になるわけだし」

千尋が、こちらを覗き込むようにして言う。彼の言わんとするところはわかったが、あえてスルーすることにした。

どんなに抗<sup>あは</sup>つても、『結婚』した事実は変わらないが、そう素直に頭を切り替えられない。

「せっかく今日は、二人の記念日なんだから、そんなふうに拗<sup>ず</sup>ねた顔をしないでほしいな？ 今日

から夫婦になったって、ちゃんとわかっている？」

「ちゃんとわかっていますよ。メッセージ見ましたし」

彼の顔を見ずにすげなく返すと、小さな笑い声と共にドアが閉まった。すぐに運転席に回り込んできた彼が乗り込む。

車の中は、想像以上に二人の距離が近くて緊張した。さらに彼のつけている香水の香りがして、どうにも落ち着かない。

「あの、社長——」

「会社じゃないんだし、社長はないんじゃない？」

「じゃあ、えつと水瀬さん」

と言ったら、速攻で突っ込まれた。

「夫婦なのに他人行儀すぎ」

「いちいち注文がうるさい。紗織はわざとらしく咳払いし、言い直した。

「……っ千尋、くん」

「まあ、それでいいんじゃないかな。二人のときは敬語も要らないよ」

楽しそうにくすくす笑う声が、いちいち神経に障る。なんでもかんでも彼の思惑どおりにするのは面白くなく、あえて敬語で話しかけた。

「それで、住んでいる場所はどこなんですか？ ご実家じゃないですよね？」

自分で聞いておいてハツとする。そうだ、彼は本社CEOの息子、つまり御曹司<sup>おたごうし</sup>なのだ。彼の両親が待ち構える豪邸を想像して青くなる。

すると、ハンドルを握る千尋がぶつと噴き出した。

「君って、昔から地味で目立たない感じだけど、表情だけは豊かだったよな。くるくる変わって見ていて飽きない」

「ははっと屈託なく笑う千尋にむっとした。

深刻に考えているこちらがバカバカしくなるほど、千尋はあっけらかんとしている。さすがに何か一言言ってやらないと気が済まない。

「こんな一度に色々あれば、驚くし戸惑います。私が不安に思っているのは、そんなにおかしいこ

とですか？」

食って掛かると、千尋が表情を改めた。

「……ごめん。確かに、君にとつてはいきなりのことだし、そう簡単に受け入れられないよな」  
もっと文句を言つてやるうと思つていたのに、素直に謝るなんて、なんだか毒気を抜かれてしまった。

むすつとしながら黙り込むと、千尋がワインカーを出して車を出発させた。車は、渋滞を避けてすいすい進み、あつという間に景色が移ろつていく。

「両親とは別居だ。僕たちが暮らすのは新築の一戸建て。僕も二月まではパリにいたし、ずっと管理会社にハウスキーピングを頼んでいたんだ」

「新築、一戸建て……ですか？」

「ああ。義父から、生前贈与つてことで譲り受けたんだ。義父には本当によくしてもらつてる」  
「そう」

彼は、母親の再婚相手とうまくやつているみたいだ。過去を知っているだけに、彼が今の家族と仲よくしていることを素直によかつたと思う。

紗織が安堵のため息をつくとき、千尋がぼつりと咬いた。

「そういうところ、昔と変わらないね」

「え？」

「いや、昔と変わらずお人好しだと思つて」

擲諭するように言つて、千尋は言葉をつづけた。

「僕のこと、怒つてるんじゃないの？」

はつきり聞かれて、一瞬言いよどむ。

「それは……怒つてますよ。あまりに突然のことばかりだし……。それに、千尋くんは昔と違う過ぎて戸惑います」

「まあ十年も経てば、色々あるよ」

ふと、その色々を聞いてみたいと思つたが、紗織は、ただ「そうですね」とだけ答えた。

「この結婚について、ご両親はなんて言つてるの？」

「本人の意思に任せる……とだけ。つていうことで、新居は二人きりだよ。新婚夫婦の邪魔をしようなんて人はいないから、安心して」

千尋はそう言つて、ちらりと意味深な視線をこちらに寄越す。

「べ、別に、私は……そういう意味で言つたんじゃないやありませんから！」

紗織は相手の挑発に乗らないようにシートに深く身を預け、外の景色に目をやった。そうしていると、紗織の中で徐々に別の不安が大きくなっていく。

（妻の務めを果たせて、まさか寝室も一緒つてことじゃないわよね？ カムフラージュの結婚なんだから、夫婦を演じるだけ……よね？）

ここにきて紗織は心配になつてしまった。それが表情に出ているのだろう。

「君の方がよっぽど、想像力が豊かのようにだね」

からかうように千尋が言った。

「なっ……そんなことありません！」

それから紗織は、黙ってそっぽを向いたまま、景色が移り変わるのを見ていた。

正直なところ、今の彼と何をしゃべっていいかわからない。だけど、沈黙したらしたで、隣にいる彼を強く意識して緊張してしまう。

（こんなじゃ、前途多難だ……）

彼の横暴さに腹を立てているのに、ヘンに過去の気持ちを思い出してしまったから複雑なのだ。この先、本当に彼とうまくやっていけるんだろうか。

しばらくして「着いたよ」と声がかげられた。見ると車は立派なガレージに停まっている。千尋に玄関まで連れて行かれた紗織は、そこで目にした情景に言葉もなく立ち尽くしてしまった。

一戸建ては一戸建てでも、目の前の家は紗織の想像を遥かに超えたものだった。

（うわ……ほんとに……こんなところに住むの!?)

紗織はただただ、目の前に建つおしゃれな二階建ての豪邸に圧倒される。

建物だけでもかなりの広さなのに、玄関からつづくアプローチの先には家庭菜園ができそうな広い庭まであった。

茫然としながら家に入ると、玄関は紗織のアパートの五倍の広さがあった。リビングはまるでモデルルームのように洗練されていて、アイランド型のキッチンが料理教室が開けそうなほど広い。

部屋数は相当ありそうで、例えばパーティーを開いてゲストを泊めたりするのにも不自由なさそ

うだ。1LDKあれば十分だった紗織にとって、あまりにもここは別次元すぎる。想像していた以上に、住む世界が違うのだと肌で感じた。

リビングの真ん中で途方に暮れていると、千尋が声をかけてくる。

「こっちにおいで。君に見せたい部屋があるんだ」

千尋に手招きされ、紗織はふらふらとついて行く。案内された部屋は書斎だった。

そこには、デザイナーが必要とする機材や道具が一式揃っている。壁際に並べられた二体のトルソーにはかわいらしいワンピースがかけられていて、スパンコールやビーズ刺繍（ビード）がキラキラと輝いている。

「すごい……」

思わず紗織は目を輝かせた。

「ここは君の仕事部屋にするといい」

「えっ、いいんですか？」

興奮して思わず食いついてしまったから、紗織はハッとして口元に手を当てる。

「よかった。そんな風に気に入ってもらえると、準備した甲斐があるよ」

ホッとしたように胸を撫なで下ろす千尋に、紗織はおずおずと問いかけた。

「わざわざ私のために？ どうして……」

「妻のために何かしたいって思うのは、おかしいことかな？ 最初に言ったはずだよ。結婚したからには、君を大事にするって」



「わかりません。そんな、見せかけのやさしさなんて……だって」

この結婚は、互いの利益のためにした契約結婚なのだから……そう言おうとした紗織の唇に、ちよんつと千尋の人差し指が添えられた。

「ストップ。せつかく喜んでるんなら、興奮するようなことを言わないで」

千尋の顔が間近に迫ってきて、我に返る。

「……つよ、喜んでるわけじゃ……」

紗織は顔を背けて、唇に添えられた彼の指を外した。

「まあいいよ。それより、君に渡したいものがあるんだ。こっちに来て」

千尋はそう言って紗織の手を引っ張る。

「あつ、ちよつと……!」

相変わらず彼は強引だ。

(昔ってこんなだったっけ?)

そう考えて、すぐに思い直す。彼が藍沢から水瀬に変わったように、あの頃の彼と今の彼は違うんだろう、と。

「そこに座って待ってて」

紗織は、リビングのソファに座らされる。少しして、小さな箱を持って戻ってきた千尋が、紗織の隣に座った。

千尋は持ってきた白い箱から、深紅（しんく）のベルベットの箱を取り出し蓋（ふた）を開いた。中には大きさの異

なる二つの指輪が入っていた。

これは——もしかしなくてもマリッジリング!?

紗織は、言葉もなく千尋の手の中の指輪を見つめる。

「エンゲージリングは嵌（は）めてくれてるみたいでよかった」

千尋が紗織の左手を見ながら微笑んだ。不意打ちをくらって、紗織はとっさに左手を隠す。

「こ、これは……指から抜けなくて、仕方なく……」

彼の思いどおりになっているみたいと感じて、紗織はしどろもどろになって言い訳する。

「そうだね。だから、契約の仕上げに、指輪の交換を……ここでしょうか」

紗織は千尋と指輪を交互に見て、息を呑んだ。

ここまできて、いやだとは言えない。けれど、素直に頷（うなづ）くこともできず黙り込む。

すると、千尋が紗織の左手を取り、やさしく自分の方に引き寄せた。そして、エンゲージリングの嵌（は）まった薬指に、マリッジリングを嵌（は）める。緩（ゆる）くウエーブがかかったマリッジリングのデザインは、あつらえたみたいにしンプルなエンゲージリングを輝かせた。

その冷（ひや）え冷（ひや）えとした輝きは、まるで『契約』を強調するかのようだ。

「ぴったりだね。じゃあ、君も僕に指輪を嵌（は）めて」

そう言って、千尋が左手を差し出してくる。紗織は震える手で、千尋の手に触れた。

男らしいごつごつした手、節くれだった長い指先……。純粹にデザインを描いていた男子高校生の繊細な手ではなく、大人の男の手だ。

おそるおそる薬指に指輪を通すと、なんの違和感もなくきれいに収まった。

「じゃあ、あとは、誓いのキスだ」

言うや否や、くいつと顎を持ち上げられ、千尋の顔が近づいてくる。すぐに反応できなかった紗織は、慌てて彼の胸を押しした。

「ま、待ってください。誓いのキスって……」

「結婚した二人が、交わす誓いがあるだろう？」

至極当然のように言われて、紗織は戸惑う。

「で、でも……私たちは、そういうんじゃないよって」

「結婚は結婚だ」

千尋は紗織の震える唇を親指ですつとなぞった。その甘美な感触にぞくりと背筋が戦慄く。この唇は自分のものだとしても言いたげに、彼の眼差しに野生の色が灯る。

逃げたいのに、目を逸らすことができない。

(カムフラージュとか言うくせに……どうしてそんな目で私を見るの)

千尋が長い指で紗織の眼鏡をすつと外した。

「君の素顔をこうして見るのは……初めてだ」

千尋が紗織の目を間近から覗き込んでくる。紗織はとっさに顔を背けた。

紗織は自分の目にコンプレックスを持っている。フランス人を曾祖母に持つ紗織の目は、日本人にしてはかなり色素が薄い。昔から、地味なくせに似合わないところかわれてきたのだ。

だからこんなふうに、じつと目を見つめられるのは好きじゃなかった。視力が悪いわけでもないのに眼鏡をしているのも、そのせいだ。

「そう構えないで。これは……契約のキスだ。そう言えば、君はしないわけにいかないよね？」  
まるで睦言を囁くような甘い声。

「ずるい……」

「君だって、本当は僕に興味があるくせに」

千尋に意地悪な視線を向けられ、紗織の顔にさつと朱が走った。

「そんなことありませんっ」

「そう？　じゃあその気にさせるのが、夫である僕の務めだよね？」

そう言つて、再び千尋が紗織の顎をくいつと上げる。

「……っ！　そうやってなんでも契約つて言えばいいと思ってるのが、ずるいつ！」

その反論を塞ぐように、千尋が唇を重ねてきた。

紗織はいやいやと頭を振る。けれど、千尋の両手に頬を包まれ、身動きが取れない。さらに酸素を求めて開いた唇の間から、容赦なく舌が入ってくる。初めての感触に、紗織はパニックになった。

「……んっ……っ！」

熱い吐息と共に、彼の濡れた舌先が、怯えて縮こまる紗織の舌をなぞったり絡めたりする。互いの舌先が擦れるたびに、じんとどこかが甘く痺れた。

身体に力が入らなくなり、膝がかくかくと震え出す。何度も角度を変えて重なる唇と、口腔を貪

る荒々しい舌の動きに翻弄され、何も考えられなくなっていく。

「んう……んんっ……」

神聖な誓いのキスを求めたくせに、身勝手にそして傲慢に唇を奪った彼に苛立ちが増す。なんとか腕に力を入れて彼の胸を押し返した。その直後、どさりと音を立ててソファに押し倒され、さらに深く口づけられる。

「はっ、んう……やめ、……んんっ……」

舌をやさしく絡められ、ぴくんと身体が反応した。拒絶しながら感じてしまった紗織を、薄く目を開けた千尋が押揃うように見つめてくる。

やがて、互いの唾液で濡れた唇が、銀色の糸を引いてゆっくり離された。頭がぼうつとして、頬が焼けるように熱い。どちらのものかわからない荒々しい呼吸がリビングに響く。

間近で見つめ合ったまま、獐猛な光を宿す彼の視線に囚われた。逃げたいのに、腰が抜けてしまつて動けない。洋服越しに触れる胸から、激しい心臓の音が伝わってくる。

「君その顔……他の男に見せたことはある？」

少し掠れた声で聞かれた。

「その顔……？」

質問の意図がわからず、紗織は戸惑う。

「目を潤ませて蕩けてる顔だよ」

妖しく頬を撫でられ、紗織は耳まで熱くなるのを感じた。

「これから先、他の男には絶対に見せないで」

独占欲を露わにした男の眼差しに射すくめられ、どくりと鼓動が高まる。こんな千尋を見るのは初めてだ。

「どうして……」

「当然だろう？ 君は僕の妻なんだから」

紗織の左右の手首をそれぞれ拘束するようにソファに組み敷いて、千尋が言った。

「……っは、離して」

「君が僕を拒むのは、プライドに障るから？」

「言ってる意味がわかりません。こんな、無理矢理するなんて」

「無理矢理……ね。君も気持ちよさそうだったけど？ 余計なことを考えずに僕を受け入れてくれれば、気持ちよくなれるのに」

語尾が甘く掠れるから、求められていると錯覚しそうになる。

「……ほんとに、ずるいつ」

「ずるくていいよ。君は僕の妻になった。君を喜ばせるのも、泣かせるのも、僕だけだ……」

熱のこもった彼の言葉に、紗織は戸惑う。今までにないほど真剣な彼の表情を見ると、何か別の深い意味があるように感じたのだ。

「どういう意味……」

「……答えは、君が僕の中から探してよ」

唇が再び重なる。千尋はちゆうつと紗織の上唇を啄み、下唇も同じようにした。そうやって甘く翻弄しつつ、また深く口づけてくる。

「ん、やつ……」  
角度を変えながら何度も重ねられるたびに、水気を帯びたりリップ音が艶めかしく紗織の耳を犯していく。

彼のキスは甘い。まるで熟したフルーツを齧ったみたいに、その先の味が知りたくなかった。ダメ、ダメ……と、頭の中で何度となく抗うのに、身体が言うことを聞かない。

さつき散々刺激された口内には甘い余韻が残っていて、彼の舌ですぐに甘く痺れるような心地にされてしまう。

やさしく髪を撫でる千尋の手の仕草に、思いがけず胸がきゅんとする。

彼の指先は紗織の無防備な耳たぶをくすぐり、うなじをなぞるように愛撫して、後頭部をぐっと押し上げた。そうされることで、よりいっそう彼の唇と深く交わり、唾液ごと舌先を強く吸われる。

その刹那、腰の奥にじわりと熱いものが滲み出てきた。

(やだ……どうしよう、私……っ)

経験のない紗織にもわかる。自分の身体が今どうなっているのか……

「ん、水瀬……社長……」

「社長じゃない。ふたりのときは名前で呼んでって言ったはずだ」

「……っ」

そう言っつて、彼は紗織の舌を絡め取る。必死に理性を保とうとするのだが、甘美な快感の渦に呑み込まれそうになる。

互いの荒い呼吸と舌を絡め合う水音が、官能的な衝動を煽っていく。

彼のキスは強引だけどやさしく、蕩けるほど甘い。もっとしてほしいという欲求が止められない。

(……どうしよう、こんなの初めてで……何も考えられない……)

深く唇を貪りながら、千尋が体重をかけてくる。重なり合った身体が熱く、苦しいのに心地いい。まるで娯楽でも飲んだみたいに、とろとろと思いが蕩けてゆく。

「……ん、……千尋くっ……」

頭の中が真っ白になり、かくりと手首の力が抜けた。

酸素を求めてどちらともなく唇が離れると、互いの吐息が荒々しく入り乱れる。

彼の濡れた唇や艶っぽい吐息が、どれほど濃密なキスを交わしていたかを物語っていて、紗織は恥ずかしくてまともに見ることができなかった。

紗織の耳元に唇を寄せ、千尋が甘く掠れた声で囁く。

「このまま泊まっていく？ 君さえいれば……新婚生活ははじめられるよ？」

熱い吐息が耳に触れ、ぞくっと甘い痺れが走った。

千尋の唇は、そのまま耳の下を伝い首筋を這っていく。そして、皮膚の薄いところを痛いぐらいにきつく吸われた。